

## 子どもと表現をめぐって

——子どもは変わったのか？——

今村方子

### はじめに

筆者は、1990年より今日まで20数年間、Y市で音楽を仲立ちとして子どもの創造性の育ちを意図する親子のリトミック教室を開催して来ている。スタッフは筆者と保育者とピアノ演奏者3人である。

就園前の0歳から3歳までの子どもを連れて母親たちがやってくる。通常は母と子、時々父と子であるが、最近では祖母と孫という様態も見かけるようになった。その親子の風景について、気付くことがある。

それというのも先生たちがよく話すのだが、子どもたちが大人になった、お利口になったというのである。その具体的な理由を聞くと、彼らの身体が動かないことである。通常、子どもたちは、歌や音楽が聞こえだすとすぐにお尻を浮かして拍子をとったり、手拍子をしてその気分を表すのが一般的、あるいは必ずといってよいほど跳んだり跳ねたり走りだしたりする子どもたちのはずであったのだが、母親の膝でじっと見ている期間が長くなったというのだ。また、数年前の子どもたちは小さなレインボウカラーの卵マラカスをみせると親の膝から我も我もと飛び出してきて、いち早く自分のモノを取ろうとする姿が見られたものだが、今の子どもたちはもらえるまでじっと待っている。とにかく、保育者が「待ってね、順番……」と言わなくてよいのである。まるで保育者はテレビ中の人物になった気がすると言っている。

また、音楽に乗って電車ごっこを楽しむ活動の時、「電車に乗ってどこかに行こう！みんなどこに行く？」と保育者が聞くと、女兒「ムコウガワ！」これにはのけぞってしまった。この年頃の子どもがとても使うとは思えないことばだったからである。これまでの活動では、大抵の子どもは「ユメタウン」とか「サンリブ」とか日常母親とともに行くことの多い大型スーパー店を言うことが多かったので、それを期待していたのだが……。勿論他児は何にも言わなかった。女兒は「ムコウガワ」に何があることを期待していたのかと事後の反省会で話題になった。

さらに保育の現場で聞く話だが、子どもたちに何かをした後「どうだった？」尋ねると、必ずすぐに「楽しかった」をよく聞くことや聞かれたことにそつなくこたえる姿などが多く見受けられるようになったという。

本当に子どもたちは変わったのか、もし変わったとすればその背景に何があるのか等々これからの表現指導に携わるものとして整理しておきたい。

## 1. 子どもたちの姿を比較してみると……

私たちが表現の場で子どもたちの表現を「子どもらしい」という時とはどんな時であったのか。

8年前のデータだが、当時の子どもたちの姿として、筆者らは、以下の事例を執筆している<sup>1</sup>。以下はその抜粋である。

A子：走ったり跳んだり、気持ちの高まりとともに、身体が動く感じで、自分からというより周りに影響されて表現する（雰囲気につられて動き出す。）／B子：色々な面で慎重だが、不安材料がなければ、自分のやりたいこと、動きなどをあらわしたり伝えたりできる（不安要因がなければ表現できる）／C子：自分の決めた動き（きれいな動き、かっこよい動き）に没頭するが、音楽との関わりや気持ちあまり感じられない（自己中心性。）／D男：ちょこちょここと走っていることが多い、音やヒトの声が耳に入る時と全く聴いていない時がある（自分流、自己中心性）／E子：走ったり跳んだりが多く、動いている感じ。先生や友達を見て自分もやってみようとしている（動くことが大好き。模倣性もある）／F子：遊びにはいりこめない感じであるが、先生や友達と同じようにやっていることもある。走ったり、テンポが速くなったりなどして雰囲気が高まってくると、自然な表情が見られることもある（まだ自己中心的だが雰囲気が状況によっては流れに乗る）。／G子：遊びに入れないと周りを走り出すことがある。こだわりが思うようにいかないと泣いてなかなか動き出せない（まだ不安定な感じだが、むずむずとして動きたい感じ。思うように自己感情が制御できない）。

月齢などの記録はないが、1歳半ごろから2～3歳期の子どもの音楽に対する子どもの反応がよくあらわれている。リズム教室は4月に始まり、翌年3月で一通り完了する。その間に先生と子どもたち一人ひとり、子どもたち同士、親と先生など、それぞれ互いに親しみが増す頻度にあわせて、教室プログラムを楽しむ姿となる。前述の子どもたちの姿は確か7・8月ごろであったので、前年度からの継続会員や入室したての親子などばらばらで、親子集団があまりまとまっていないう状況である。だからこそ子どもたちの姿には、身体は動こうとするが、集団にまだあまりなれない不安からちょっとした躊躇が生じ、なかなか動き出さない。しかし、子どもの本能としての身体はもぞもぞと動きださずにはいられない。そんな様子が垣間見られる。そして年度末には、子どもたちは、自動車になって走り回ったり、カエルになってジャンプしたり、ウサギになって跳んだり、親子キリンになって歩いたりなど、さまざま得意とする運動を用いた表現やあふれで個性が見えるようになる。このように、子どもたちはとかく心と体が一心同体である。音に誘われ、友達に誘われ、場の雰囲気に誘われ、身体が動き出す。親たちはそんな変化を笑って眺めていたり、子どもとともに表現しようとしていた姿が印象的である。

1 岡よしみ、今村方子（2005）子どものリトミック指導における即興演奏のあり方について、日本ダルクローズ音楽教育学会誌『ダルクローズ音楽教育研究』、通巻31号、27-38

子どもが子どもらしくいられる環境や赤ちゃんがのびのびと育つために必要な環境は、臨床的には「抱える環境」(Winnicott<sup>2</sup>, 1965/1977)とされているそうである。子どもが育つためには大人が世話し関わる必要があるが、関わるためには関わるための場、つまり環境がまず必要であるという。そして、この環境が安定していなければ、子どもの自己の発達にも影響を与えることが指摘されている(Winnicott, 1958/1989)。子どもの育ちにとって必要な愛着関係の保障を環境の側面から解説したものである。さらに、幼児期や児童期ばかりでなく青年期に至っても「発達促進的な環境」(Winnicott, 1965/1977)を家庭や学校で提供する必要があることが指摘されている<sup>3</sup>。

そして、恒吉(2012)<sup>4</sup>は、現代社会は少子・高齢社会であり地域関係も希薄となっていることから、子どもの発達促進的な環境が十分でなくなっている。子どもや子どもを育てる人々を抱える環境が社会の中に十分でない。その結果幼児虐待や子どもの規範意識の問題等が表れているのではないかと述べている。

## 2. 子どもの変容の背景を探る

筆者は、いつの時代も子どもたちは基本的には変容していないと考える立場である。

恐らくその変容と思われる点は、大人の側の時代の変化に伴う意識の変化が子どもを見る視点の変化となり、その変化に反映して子どもたちの姿もまた変化しているのだと思う。

そこで、前述した最近の子どもたちの姿の背景を理解する手がかりとして、このウイニコット(Winnicott, 1896~1971)の主として「抱える環境」という観点から解説してみたい。

人は、モノ・環境との関わり、人との関わりの中で育つと言われている。赤ちゃんは生まれたその日から、通常は親との深い愛着関係の中で生まれ、その安定した居場所を基地としながらモノや環境との関わりを深めていくといわれる。この視点は人自身の精神世界の在りようについて述べたものだが、ウイニコットの「抱える環境」とは、愛着を与える場の提供という「環境」の捉え方であるが、当たり前な考え方であるが故に、その位置づけが見落とされがちだったという。まさしくその通りである。

最近の子どもたちの親たちが育った環境を顧みながら、「抱える環境」一言い直せば、(子どもという存在を)「抱え込んでくれる環境」とでもいう方が適切かもしれない—という側面から彼らの育ちを振り返ってみたい。今現在2,3歳児の親たちの年代は20代後半から40代前半、生年月日で言うと大体1970年代~1990年代あたりとなる。丁度日本が高度経済成長の真っ盛り、豊かな日本の時代である。豊富な経済力は教育にも投資され、幼児のお受験などが盛んとなり早

2 D.W.ウイニコット (Donald Woods Winnicott, 1896-1971) 英国生まれ。小児精神科医から児童分析家、精神分析医へ転向、独立学派と呼ばれる母子関係を中心にした“対象関係論”を提唱。実践に裏打ちされた説得力ある理論と定評。

3 恒吉徹三(2012) 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第34号, 子どもが子どもらしくいられる環境について, 107-122

4 前掲書 p.107

期教育は全盛時代であった。

親たち自身の幼児期・児童期は、恐らく教室文化の中で、音楽教室、体操教室、あるいは受験教室等々に早くから追いやられた時代ではないだろうか（そのような当時子どもたちの状況を描いた小説に、城山三郎「素直な戦士たち」がある）。そのせいか、当時は子どもたちの三無主義とやら十三無主義とやらが流行り、何事に対しても興味や関心を持たない無気力な子どもたちの存在が社会問題となっていたように記憶している。そういう幼児・児童期を過ごした遊びを知らないと言われる親たちが結婚し子どもを産み育てている。あるいはそういう幼児・児童期のはしりをつくりだした親の親たち（祖父母たち）も今や団塊世代のすぐ後の世代として孫育てにかかわっている。

子どもを産み「抱える」環境として、その環境をどのように捉え子育てをしようとしてきたかが問題である。そのあたりの苦労話を聞くことも多いが、大半がまず核家族であり、夫は仕事で多忙であり、不慣れな育児に孤軍奮闘している親が多い。子どもを「抱える」現実と真摯に向き合うあまりに、鬱状態になる親も少なくない。教室で聞く親たちのなげきの声も、独身時代の華やかさと裏腹に、孤軍奮闘していつ果てるかわからないと思われる育児と戦う日々で疲れている声が多い。要するに「抱える」余裕がないのだ。また、子を「抱える」に足る精神的成長も不十分で、自分の身の上の激変に対応できかねている状況も多い。昔も今も子を持つ親は誰もこのような状況に陥るが、それを立派にやり遂げ、自己成長すると言われているが、そういう親を「抱える」社会の状況も不十分なので、通り一辺倒に片付く問題ではない。そのような家庭環境の中での少子化である。子一人親一人という関係の中で育つ子も多い。他者の表情に敏感で自己肯定感に欠ける子どもができて不思議はない。

大人の中で育ち、大人の顔色をうかがう能力に優れ、大人との共感関係をつなぐことが重要だと思ふ子どもたちができて不思議はない。大人との関係の中で大人の在り方を強要されながら子どもとしての自分を抑制する子ども時代は、目まぐるしく変化する情報化社会のなかでは、選択する時すら与えられない。自己選択の強要と自己決別の判断は、自己を想像し創造していく感性や喜びや楽しみさえも奪い取っているのではなからうか。数年前になるが、ある母親が相談に来た。やっと2歳になるかならないかの子どもを持つ母親で、相談の内容は「先生、うちの子はいつになったら私と同じ言葉が通じるようになるのでしょうか」だった。またある時は、「先生、なんでうちの子はモノを投げながらたべるのでしょうか？」だった。子どもの気持ちを受容しながらその育ちを楽しみつつ育てる喜びは彼らには微塵もないだろう。早く自分と話ができる大人になってほしいという願いだけである。

そこから、無感覚、無自覚な子どもという存在が生じてもおかしくはないと思う。子どもが自ら動き出す契機は直近の大人の言動である。それを察知して子どもは動く。そうでない時は、いつまでたってもなかなか動かない、よしんば動いてもその表現は無目的で、子どもらしい意図がまるで見えない。ほとんど親のロボットに近いと言ってよいだろう。当然その時奏でられる音楽は彼らの耳には聞こえておらず、彼らの動きは音楽に対する注意深い聴取と表現には程遠い。音楽は彼らの感情をかきたてる雰囲気（BGM）以上の何物でもない。そこにはいくら「発達促進

的な環境」が準備されていても彼らには届かない。

では、彼らが彼らの耳をもち、彼らの意思で自ら行動する、そういう子どもたちに還すにはどうしたらよいか？

### 3. 親子あそびの復活がもたらす人らしさ

最近の教室で協議している内容を簡単に紹介し、今後の課題としたい。

「あそびの復活」ということである。前述したように親たちも祖父母たちもあまり遊びを満喫してこなかった幼少時代をもつ。子どものための教室だが、親と子のために、プログラムの材料は子どもたちのものだが、親に焦点を当てて、親同士が互いの表現を楽しみあえるような遊びとして仕組み、本気で取り組む意欲を引き出すというものである。子どもたちを連れては来るが、プログラムの理解や子どもと一緒に楽しむのは勘弁してという親も少なくない。親自らがその気になり遊ぶことができるモノの開発とそこから得る喜びや楽しみが子どもたちの興味や関心を引き出し共に楽しみあう。また、楽しみあう集団の存在にも気づきあう、そして生きている手ごたえや幸せを感じるそんなプログラムの開発を夢見ている。親も子も「抱える環境」と「発達促進的な環境」づくりに向けて未来のプログラムを手掛けたい。

#### 参考文献

1. 岡よしみ、今村方子（2005）子どものリトミック指導における即興演奏のあり方について、日本ダルクローズ音楽教育学会誌『ダルクローズ音楽教育研究』、通巻31号、27-38
2. 恒吉徹三（2012）子どもが子どもらしくいられる環境について、山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第34号、107-112
3. ジャン エイブラム、Jan Abram、（2006）館 直彦（翻訳）ウィニコット用語辞典、誠心書房
4. 吉仲 淳（2011）音（音楽）の世界から見る幼児の表現性とその身体、青山学院女子短期大学総合文化研究所年報、（19）、47-64
5. 片岡杏子（2011）子どもの表現と共生する社会、美術科教育学会誌（32）、111-122